

河童七変化

火野葦平著

宝文館版

河童七変化



昭和32年4月5日 第1刷発行

定価 250円

著者

火野葦平

発行者

株式会社宝文館
(代表) 高橋長夫

印刷者

川瀬壬子

鎌倉印刷・村上製本

発行所

東京都千代田区神田錦町3-20

株式会社宝文館

振替東京280. 電(29) ³⁰¹⁹₈₇₄₆

序 詩

新河童音頭

1

神武以来とひとえど
もつと昔のその昔

おどけ河童の生まれ出て
皿をたたいて思案顔

2

神武以来のでたらめの
いまの世までも生きのびりや

空から死の灰とんで来る
皿に蓋をばせにやならぬ

3

もとより雲の性さがなれば

西に東に南北

旅の思いは遠近おちこちの

くにの姿に興やを遣る

4

河童なれども人に化け

人のなさけに浸ひたりては

人と人とのつきあいも

心の糧やそと合点顔

5

とぼけで間抜けのお人よし

それでも嘘はつくまいと

ひとりぎめして水の底

胡瓜^{きゅうり}かじつてピールのむ

6

雨にも風にもいつも負け
女にやなおさら負けどおし
それでも酒のみ三味ひいて
歌つて踊れば気も晴れる

7

折りにふれての七変化
あれこれ變つてみたものの
河童の命のみなものと
頭の皿は變りやせぬ

8

こけをとかした青インキ
蓮の葉つばの紙のうえ
筆のすさびはみだれ勝ち
それでもこの道ひと筋に

目次

わが家郷

わが家の設計

二十五年目の結婚式

年ごろのわが娘に

私の映画出演

博多美人

河童まつり

河童七変化

三

九

二〇

二五

元

四三

四六

相撲カップ——好色カップ——新

兵器カップ——敗戦カップ——悪

戯カップ——火遊びカップ——釘

カップ

旅と人

風化地帯

五

林檎園——大宰町——砂部落——

東風とイワシ——陽コあだネ村

ハボマイ紀行

六

根室半島——忍苦の顔——国境線

——祝いの日

三十年ぶりの門司

三

井伏鱒二さんのこと	一五
松本清張君	一九
向井潤吉画伯とのコンビ	二六
坂本繁二郎先生	二七
詩人 中山省三郎	二四
腹切り逸夫	二六
酒友列傳	二七
考える河童	
神武以来のデタラメ	一九
河童遠征	一五
カッパの害について	一六
困つたものは新聞である	三三

仁義ばなし	二五
好色小説懺悔録	二九
わたしの古典	三九
糞尿談義	三三
インドの二つの美術	三三
今日の中国文壇	四〇
中共の演劇・映画を観て	四九
題簽 井伏鱒二	
装幀 著 者	

わ
が
家
郷

わが家の設計

鈍魚庵を語る

今いる阿佐ヶ谷の鈍魚庵に移ってからもう四年になる。この家が出来てから、九州・東京間を忙しく行ったり来たりしている私も、宿の心配がなくなつた。無論、私の本拠は家族のいる九州若松で、東京の家は出張所である。

この家に移る前は、池上に長谷健一家と同居していた。その家も私が買つて東京の宿にしていたものだが、階下に長谷一家が住み、そのころは二階の八畳と四畳半だけで充分だつた。ところが、子供たちが大きくなり、次々に上京して来るようになったので、次第に手狭になつて、新しい場所を探さなくてはならなくなつた。そこへ偶然いい話がわいて来た。わいて来たというより、やはり私のことについて心がけてくれていたのかも知れないが、亡友中山省三郎の夫人富士子さんが、阿佐ヶ谷に空地があるから家を建てないかとい

うのである。阿佐ヶ谷はなつかしいところだ。早稲田の学生時代から、中山君は結婚せずと阿佐ヶ谷に住んでいたが、私も一年ほど一軒借りて自炊したこともある。

私の心はうごき、すぐに土地を見に行つた。阿佐ヶ谷には昔の武蔵野の名残りがいくらか残っているが、その土地もヒマラヤ杉や、銀杏、欒、欖などの茂つた森の一角にある。私は氣に入つてすぐにこの土地を買つて家を建てようと決心した。

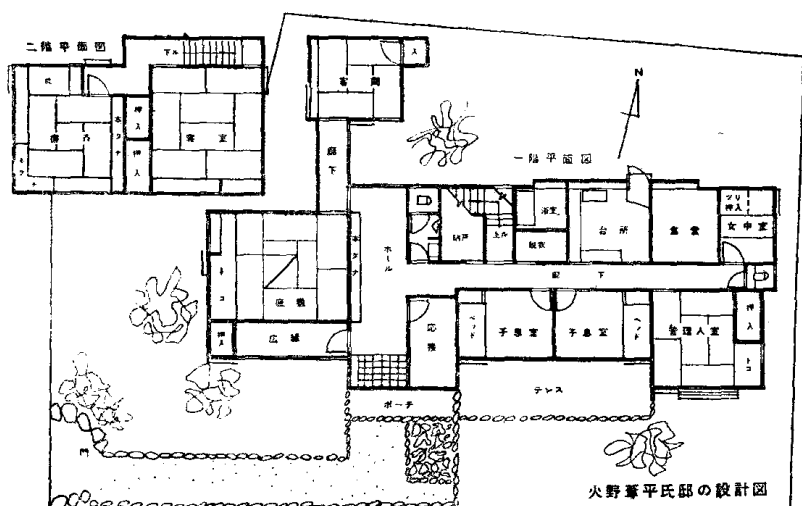
というと、いかにも金がありそうだが、実は無一文の上に借金だらけ、家も欲しいが金のことで頭をうずかせていると、土地の方は一時金でなくてはいけないが、家の方は五十万頭金をやつておけば、あとは十万か十五万かの月賦でよいという話だったので、とりかかることにした。しかし、百十三坪の土地は地主がどうしても売ろうとしないため借りるほかはなかつた。

さて、どんな家を建てたらいいか。私はパット明るい文化住宅は好きでない。ヒイヤリした感じの落ちついた家が欲しかつた。新築の家は真新しい木の色や香が床しいものだが私はそのむきだしの白木も好きでないのである。そこで、柱も障子の棧もすべて塗ることにし、天井も板天井を作らないようにした。私は紙をひろげてまづ必要な部屋数を検討した。座敷が一つ、これはどうしても必要。次に、小さな応接間、子供たちの部屋が二つ茶

の間が一つ、九州から客があつたときに泊める部屋が一つ、それに、台所、女中部屋。それから、肝腎の私の書齋と寝室、この二つは二階にする。私は設計家ではないから、専門的に計算した図面は引けないが、自分流に一応の設計図をこしらえてみた。玄関からは板の間になるので、日本間の座敷は一段高くしたい。十畳くらいにして、中央には炉を切っておきたい。

書齋はひろくなくていい。九州の書齋は八畳だが、こちらのは四畳半で充分と思つた。そして周囲をすべて書棚にする。ただ、机をおく位置は北向き窓でなければならぬ。若松の書齋は東向きにおいてあるので、朝日が真正面でへこたれる。西向きは午後がたまらない。南面は陽があたりすぎる。そこで、北が快適になるわけだが、島崎藤村なども北向き書齋を好んだという話を思ひだして、どうしてもそうしたかつた。それから、書齋にはさまざまな資料を整理して入れる押入や箱が必要だ。本や紙類は重いので、本棚のみならず、書齋内はどんな重量がかかってもびくともしないほど頑丈でなくてはならない。こういう下地を考えて、私は専門家に設計を依頼したのであつた。

中山省三郎の娘成子さんは、東大教授工学博士小野薫氏の息子さんと結婚している。小野さんは寺院建築の大家で、戦後の浅草観音、川崎大師等を設計した人。この小野さんが



中山夫人の世話で、私の家を設計してくれることになった。助手として宮川という青年が実務に当った。私はたいへんうれしいことに思い、私のプランを述べてあとは一任した。大工の頭梁は丸興建築の吉田さん、三百人もの部下を持つている親分とのことだったが、温厚で、誠実で、仕事熱心な人だった。その二人の息子さんも私の家を建てるために、毎日働いてくれた。

地鎮祭がすんでから、大体三ヶ月あれば入れるようになるだろうとのことだった。やはり九州と東京との間を往復しながらも、上京したときには、かならず普請場に行つて、すこしづつ形をなして行く家を見るのが私は楽しみでたまらなかった。しかし、建築は予定

よりずつとのびて半年あまりかかった。いい材料が東京では揃わず京都に注文したり、長雨が降ったり、阿佐ヶ谷は水はけが悪く水道工事が手間どつたりしたためである。

ところが、もう半以上出来あがつてから、上京した私が普請場に行つてみると、玄関を入つたところの正面に二階への階段がある。それを見て首をひねつた。風変りな形の階段ではあるが、なんだか旅館か料亭のような感じで落ちつかない。青写真にははじめから書いてあり、私も承認していたわけなのに、実際に出来てみると、どうもこの階段が目障りで、家全体の調和をみだしている気がしてならなかった。そこで、また二三日熟考した後、小野博士に、あの玄関の階段はとつてもらいたいと申し出た。小野さんは、惜しうにあの階段は苦心のもので面白いのだけど、肝腎の住む本人が三日三晩も考えてとりたいたいというのなら仕方がないですね、と笑つて、もうとりつけてある階段をはずしてくれた。そのあとに、書棚をつくることにした。裏階段が別にあるのだから、不自由はない。私は今でも階段をとつてよかつたと思つてゐる。

私も考えていたとおりのヒイヤリとした落ちついた家が出来た。建坪約五十坪、貧乏なので疑ふことは出来なかつたが、一見古風なようで近代的な感覚もあり、京都風と東北風とがよく混淆して民芸的な味も出ている。私は小野さんと宮川さんとに深く感謝してい